極覚
社研だより
第99号

令和７年11月
発　行　京都市小学校
教育研究会社会科部会
責任者　京都市小学校
社会科教育研究会
當　麻　章　英

京都社研の研究の積み重ねを実感

京都市小学校社会科教育研究会 会長
春日野小学校 校長　　當麻 章英

早いもので、令和７年度の２学期も半ばを過ぎ、各校では運動会や学習発表会が行われ、子どもたちがめあてに向かって一生懸命活動する姿が行事ごとに積み重なっているのではないかと思います。京都社研の研究活動も積重ねを実感する半年間だったと感じています。

今年度より、毎月第４金曜日に「教職員スキルアップデイ」が設定され、研究会活動の推進と研究会員以外の教職員が研究会活動に参加し、スキルアップを図るとともに研究会への入会を促進する取組が始まりました。社研では、その趣旨をしっかり理解し、例年よりも早く各部会の活動を始動し、６月より公開授業研修や指導案検討会など様々な研究会活動を提案していただきました。研究会員はもちろんのこと、研究会員以外の社会科の授業に興味をもつ若い先生方が参加され、大変有意義な研究会活動が繰り広げられたのではないかと思っています。

京都社研の研究内容についても、各学年部会が公開授業研究を積み重ねており、研究の柱である「三つの矢と二つの環」について実践を繰り広げ研究が深められています。特に昨年度より京都社研では、学習問題の解決を図るための追究活動において、複線型の学習過程について研究を進めている途中ですが、全国大会の実践発表に向けても、この複線型追究活動は全国からの参観者の皆さんが、大変注目している学習過程だと思われます。

子どもが学習問題の解決のために、目を輝かせながら主体的に調べ進める姿を実現するためには、毛利元就よろしく三つの矢が一つ一つの取組ではなく、繋がりまとまっていることがとても重要です。すなわち、教師も子どもも学習問題の解決がゴールであることを、全学習過程で意識できているかどうかが鍵になります。その意識を持続させるための「三つの矢」であることを共通実践していきたいと考えます。

複線型の学習過程の中で、子ども一人一人が今調べていること、次に調べていくことが積み重なりそれが学習問題の解決に迫っていくという意識を常にもって調べる活動を展開すること、教師もその意識をもって子どもを見取り、学習問題解決に導いていけるような声をかけていくこと、それが「三つの矢」を繋ぎまとめていくことであると考えています。

来年度の全国大会では、社研の取組が反映された会場校の子どもたちが主体的に調べ考える社会科学習を生き生きと展開している姿を、全国からの参観者の皆様にお見せできるよう、今後も研究活動を進めていきたいと思っています。そのために社研の実践の積み重ねが土台となって、各校の研究が推進されると考えています。全国大会に向けて志を一つに頑張っていきましょう。

手間隙かけて子どもの心に届く授業をつくる

京都市総合教育センター　指導室　指導主事　　松村　一也

日頃より本市教育推進にご支援・ご協力いただいておりますこと、深く感謝申し上げます。昨年度は様々な実践から多くのことを学ばせていただきました。今年度も、京都市の社会科教育の推進と発展のために研究会の皆様と共に尽力したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

最近、縁あって、私が採用されて間もない頃に担任をした教え子（現在は立派な大人です）と再会し、話をする機会がありました。その教え子が「もう 20 年も前のことだから記憶も断片的ですね。でも、先生の授業で自動車工場の授業は今でも覚えています。」と言ってくれたのです。

この授業は、採用 2 年目に研究会で初めて部会の授業をさせていただいた時のものでした。当時の私は教職へのやる気はみなぎっていましたが、授業力、学級経営力、子どもの見取りなど、教師としての力はまだまだ未熟でした。指導案作りも教科書の指導書通りで、アイデアも乏しく、部会で「松村先生は、一体どんな授業をしたいの？」と問われ、言葉に詰まったことを覚えています。しかしその後、部会の先生方から数々の授業アイデアをいただき、「あとは先生の好きな通りにやったらいいよ。」と背中を押していただきました。

この部会の時間は、私の授業観が大きく変わった瞬間でした。「これまでに誰もやったことのない授業をつくる！」という思いが湧き、自動車工場のシミュレーション授業を構想しました。何種類もの自動車のパンフレットを紙に写し取り、それを細かな部品に分け、色画用紙に印刷し、それらを切り取り……と、試行錯誤を重ねながら授業をつくり上げました。課題はたくさんありましたが、事後研では「子どもたちが意欲をもって学んでいたね。」「面白いアイデアで先生の思いがよく分かりました。」と声をかけていただき、授業づくりにかけた時間と工夫が報われた瞬間でした。

さて、今年度はスキルアップデイが設けられ、研究会の授業は、研究会員はもちろん研究会員以外の方にも参観しやすくなりました。私も可能な限り参観させていただきましたが、どの授業も、先生方が実物資料を取り寄せたり、手の込んだ教材を準備されたりと、まさに“手間隙”をかけてつくられた授業でした。子ども達は目を輝かせながら授業に取り組み、事後研では授業者の先生が自分の考えを堂々と語っておられました。

現在、ウェルビーイングな学校教育の実現に向けて、働き方改革が進められています。業務の効率化や精選が求められる中で、「手間隙かける授業づくり」は一見すると逆行しているように見えるかもしれません。しかし、働き方改革の本質は、教師が本来の使命である授業づくりに集中できる環境を整えることにあります。だからこそ、私たちは“手間隙をかけて子どもの心に届く授業づくり”に時間とエネルギーを注ぐことができるのです。決して、逆行ではなく、働き方改革を進めていった先は、私たち教師の本分である授業づくりに手間隙をかけることにつながるのです。そしてそれは、子ども達を豊かに育むことにつながるのです。

私の拙い実践であっても、子どもの心に届いた授業になっていたことが分かりました。全国大会に向けて実践されている研究会の授業の一つひとつが、子どもの心に届くものであることは言うまでもありません。このような授業実践を進めていくことができる社会科教育研究会の活動は、ウェルビーイングな学校教育の実現に向けた、誇れる営みであると実感しています。

今年度も、たくさんの授業実践の中で、手間隙かけて子どもの心に届く授業づくりを共に進めていき、たくさんのことを学ばせていただけることを楽しみにしています。

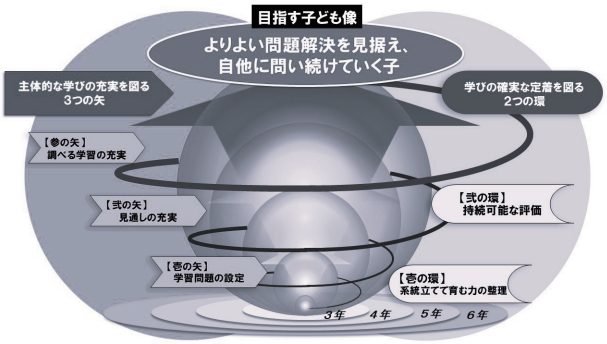
令和7年度
研究主題

＃子どもが調べ考える社会科学習

～「今」を見て「先」を見通し　自他に問い続けていく子どもの育成を目指して～

研究部長　　加藤　俊介

昨年度より研究主題『＃子どもが調べ考える社会科学習』を掲げ、研究を進めてきました。来年度の全国大会に向け、今年度は１学期から積極的に各学年部で実践を積み重ねていただき、その充実を図っています。今年度は副題を『「今」を見て「先」を見通し　自他に問い続けていく子どもの育成を目指して』とし、図のような研究構想の基、さらに研究を進めています。



研究主題に示されている「調べ考える」とは、これまでの社会科の学習でも頻繁に使われてきた言葉です。令和の今求められる『調べる』とは、教師が調べる資料を一つ一つ提示したり、１時間ごとにその時間調べる問いを投げかけたりするのではありません。子ども自身が学習問題の解決に向け、自分たちは何がわかっていないのか、何を調べる必要があるか予想を整理しながら問い化し、その問いについて調べる計画を立て、個々が解決に向けた見通しをもって調べることを意味しています。調べる上で必要な時間や資料、順序なども、それぞれの見通しに応じて設定します。また、『考える』とは、調べて分かった事実をもとにさらに社会的事象の意味について考えたり、これからの社会のあり方について考えたり、さらには自らの学びについてふり返って考えたりすることをも意味しています。自分にとって必要な学習を考えながら個別に、或いは協働しながら学びを深めていく、見出した事実をもとに学習問題や社会の因果関係、意味について子どもたちが主体的に考えていく、令和の今求められるこのような調べ考える学習の充実を図ります。

このような「調べ考える」学習の充実を図るためには、それぞれの学習場面で、子ども自身が今の自分の立ち位置、自身が置かれている状況等を認識することが大切です。子どもたちが自分の「今」を把握することで、問題や問い、社会の課題等を見出したり、予想を立てたり、その問いを調べ進めたりすることができます。「今」の状況を踏まえるからこそ、「今」の自分を更新し、その「先」、どのようなことを考えるべきか、何をすべきかを判断したり、よりよい自分や社会のあり方等を問い続けたりすることができるようになります。単元の学習内で、そして、単元の学習だけではなく、実際の社会の中での自分自身の姿、これからの自分を考えることができるようにしていきます。

このような「今」と「先」の子どもの姿を下表のように整理しています。「今」を見て「先」を見通す子どもの具体的な姿を共有し、自分に、他者に、社会に、未来に問い続けていく子どもの育成を目指し、来年度の全国大会に向けて実践のさらなる充実を図ります。

「今」を見て「先」を見通す子どもの姿　整理表

	単元内：学びの中での姿＜未来思考＞（今の自分）→（今が更新された自分）		単元内から社会へ：社会へ向かう姿＜未来志向＞（これからの自分）
	今	先	今
壱の矢	・生活経験等を通じて知っていると思っていた社会的事象について、知らなかったということがわかる。 ・今ある当たり前が当たり前ではないことに気付く。 ・今当然ある状況が、実は問題をはらんでいることに気付く。 等	・わかっていないことがわかった、ということをもとに学習問題を設定する。 【…であるはずなのになぜ～】 ・当たり前でない状況がなぜ現実に可能なのか、ということをもとに学習問題を設定する。 【なぜ～が可能なのだろう】 ・どうすれば現状の問題を解決できるか、ということをもとに学習問題を設定する。 【どうすれば…よいのだろう】 等	・調べている対象や今の社会の様子を見て、課題や良さ等の現状を捉える。 ・単元を通じて分かった「今」ある課題に真剣に向き合い、「今」のままではいけないと強く思い、よりよい「先」のために切実な願いをもちながら、解決するべき学習問題を設定する。 ・未来志向の問いに対して予想をたてたり、調べる方法、議論の視点を考えたりする。 ・学習問題の解について、資料や生活経験、既習事項等をもとにして、「きっとこうかもしれないな」と自分の考えをもつ。 ・調べた事実をもとに「今」ある課題の意味を考え、その解決に向け、よりよい「先」のための方法を積極的に話し合う。 ・社会に見られる課題に目を向け「未来」にわたって持続可能な社会のあり方について、「自分」にできることや「みんな」にとってよりよい社会のあり方について考える。
弐の矢	・学習問題の答えを予想する。 ・予想をもとに何が分かっていないか、何が分かればよいかをもとに問い化をする。 等	・問い化した問いをもとに調べる内容を計画する。 ・調べる方法・順序を選択する。 ・それぞれの調べる内容に応じた時間配分を設定する。 等	
参の矢	・調べたい問いに対して、自ら資料を選び、調べを進める。 ・自分の学びが思うように進まない場合、必要に応じて他者と対話をしたり、指導者に資料を請求したりする。 ・様々なツールから調べる資料を選んで調べる。 ・計画に即して調べる。 ・問題解決に向かう自分の現状を客観視し、調べて得た情報や考えていること、学び方等を見つめる。 等	・計画した調べる順序や時間配分等を修正しながら調べる。 ・よりよい問題解決に向けて、自分の調べ方を見直したり、足りない情報を獲得しようとしたりする。 ・調べて分かった事実をもとに意味を考えたり、多角的に考えたりする。 ・調べたことをもとに考え、さらに深まった問題を見出す。 【なぜ→なぜ】 【なぜ→どうすれば】 等	先

３年部会

◇３年部会テーマ◇

地域の人々の営みから学びを深め、
自分と地域とのつながりを考える子ども

３年部会では、地域の様子や人々の姿を通して学ぶことで、子どもたちの地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を育てられるようにしたい。

今年度の研究提案を受け、部会テーマの実現に向けては、特に「主体的な学びの充実を図る三つの矢（学習問題の設定・見通しの充実・調べる学習の充実）」に重点を置きたい。

３年部会テーマ実現のための方策

■ 壱の矢：学習問題の設定

子どもたちがより主体的に取り組むことができるように、単元の特性に合わせて「どのように」だけでなく、「なぜ」の問いを設定する。そうすることで、自分と地域とのつながりを考える子どもを育みたい。

■ 弐の矢：見通しの充実

昨年度までの取組から、個別に予想を立て、調べる学習の見通しをもつことや、自らの学びを自己調整することに対しては、支援を必要とする子どもが多くいた。今年度も、３年生の子どもたちにとってのよりよい活動や支援を考え、実践していきたい。

■ 参の矢：調べる学習の充実

昨年度までの実践においても、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることで、調べる学習場面において大きな成果が見られた。そこで、まずは、社会科の学び方や資料の見方などを丁寧に指導したり、問題解決的な学習のプロセスを大切にしたりする。その中で、子どもたちが立てた学習計画に沿って、自ら調べることや意味を考える場面の設定をし、調べる学習の充実を図りたい。

【授業実践予定】

「工場でつくられるもの」
柊野小学校　麻生 和希　教諭

「商店のはたらき」　大塚小学校　嶺 温奈　教諭

「安全なくらしを守る」
久世西小学校　兼山 柚紀　教諭

（文責　大藪小　川合 翔子）

４年部会

◇４年部会テーマ◇

自分たちのくらしを支える人々のおもいや願いについて学びを深めることで、地域社会に対する誇りと愛情をもち、地域社会と自分とのつながりを考える子ども

４年部会では、京都府内の特色や自分たちのくらしを支える人々の姿を学ぶことで様々な見方考え方をすることを通して自分の住む地域を見つめ自分とのつながりを考え、地域社会に対する誇りと愛情をもてるようにしていきたい。

４年部会テーマ実現のための方策

■ 学習問題の設定・見通しの充実

子どもたちが、調べ考える学習を展開できるようにしていくために、学習問題と予想を考えた後に「学習問題を解決するために何を調べればよいか話し合わせる」時間を設定したい。そうすることで、調べる内容が明確になり子どもたちが主体性をもって調べる学習を進められると考えている。

学習指導要領をもとに子どもたちに調べさせたい事象を明確にして、どのような事実とどうやって出合わせれば子どもたちが主体的に取り組める問いを設定することが出来るのか、また、予想を基に問い化して主体的に調べることが出来るのかを追究していきたい。

■ 調べる学習の充実

昨年度は「調べる場面をどう展開すれば子どもたちがより考えを広げたり深めたりできるのか、調べる学習を充実させることが出来るのか」ということに重点を置いて研究を進めた。今年度は調べる学習の充実と共に、調べたことをどうやって概念化してまとめに繋げていくか、ということに重点を置いて研究を進めていきたい。

【授業実践予定】

「くらしとごみ」　大塚小学校　勝部 順也　教諭

「昔から続く京都府の祭り ～祇園祭～」
洛央小学校　山田 健太郎　教諭

「古くから受けつがれてきた産業のさかんな宇治市」
池田東小学校　片山 拓　教諭

「外国の都市とさまざまな国際交流をしている舞鶴市」
桃山東小学校　外園 善基　教諭

「ゆたかな自然を生かす宮津市」
下鳥羽小学校　下田 竜聖　教諭

（文責　久世西小　仙波 俊輔）

５年部会

◇５年部会テーマ◇

社会のあり様や、そこに生きる人々の姿から学びを深め、よりよい社会へ向けて、社会と自分とのつながりを考えようとする子ども

５年部会では、国土の特色、産業の現状、社会の情報化について、国民生活との関連を踏まえて理解すること、また、社会的事象の特色や社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力を養うとともに、それらを基に議論したりする力を養うことを中心に授業づくりを進めていきたいと考えている。

５年部会テーマ実現のための方策

■ 壱の矢：学習問題の設定

- 子どもの思考の流れを大切にした単元構想の工夫を図る。特に子どもが捉える問いを大切にした学習問題を作り、そして、学習問題を追及・解決する問題解決学習を進める。

■ 弐の矢：見通しの充実

- 「自らの学びを調整する」という視点を単元構想の中に適切に位置づける。
- 社会にみられる課題を理解したうえで、よりよい社会の実現に向けて必要なことや、自分と社会との関わりについて問い、選択・判断し議論を深める。
- ふりかえりをする場面や視点を意図的に設定し、子どもが自分の学びを実感できるようにする。

■ 参の矢：調べる学習の充実

- 子どもにとって社会的事象が身近に捉えられたり、思考の流れを想定したりできるように実物を用意したり資料提示を工夫したりする。
- 見方・考え方を働かせながら、目的に応じた資料を集め、情報を的確に読み取り、整理・分析し、そこから得られた事実を相互に関連付けたり総合したりして思考・判断・表現していくことを工夫する。

【授業実践予定】

<１１月上旬～１１月下旬>
「自動車をつくる工業」
大塚小学校　山﨑 文音　教諭
美豆小学校　大本 勇介　教諭

<1月中旬～２月初旬>
「情報を生かす産業」
大宮小学校　上地 侑樹　教諭
朱雀第八小学校　福本 光莉　教諭

（文責　待鳳小　成宮 未希子）

６年部会

◇６年部会テーマ◇

社会の発展に寄与した先人や今を生きる人の営みから学びを深め、社会と自分とのつながりを多角的に考える子ども

６年部会では、研究部の主題設定を基に、政治・歴史・国際社会について学んだことを自分とつなげて考える社会科授業を目指していきたい。また、小学校社会科としての系統性に注目し、他学年や中学校への接続を意図しながら、よりよい部会の形を検討していきたい。さらに、教員としても学び続ける存在であるために、ニーズに合わせた勉強会を設定していきたい。

６年部会テーマ実現のための方策

■ 視点１：子どもの主体性を引き出す問題設定

社会科は問題解決的な学習の展開が必須である。単元、さらには学年を通して社会科学習を進めるにあたって、質の高い「問い」の設定が、それ以後の子どもたちの活動を左右するといえる。特に因果関係を問う、価値・判断を追究する「問い」の充実を目指し、単元設定を深めていきたい。

■ 視点２：学びの見通しがもてる学習展開

先の不透明な現代社会において、自分で見通しをもって学びを進めていく力が求められている。そのため「問い」に対する答えを予想したり、必要な資料・道具を想定したり、鍵となる物事は何かを考えたりする展開を大切にして時間設定をしていく。

■ 視点３：子どもが自発的に進める調べ学習

子どもたちの主体性を核とした調べる時間を設定できれば、子どもたちは自発的に学習を進めることができるはずである。全体の「問い」で学級としての学習の方向性を確かめるが、子どもたち個々の「問い」も大切にすることで、多角的に物事を見つめ、考えることにつなげていきたい。

【授業実践予定】

<7月上旬>「天皇中心の国づくり」
久世西小学校　山下 将輝　教諭

<１０月中旬>「明治の国づくりを進めた人々」
洛央小学校　藤田 湧登　教諭

<１２月中旬>「世界に歩みだした日本」
下鴨小学校　内藤 和哉　教諭

<2月中旬>「日本とつながりの深い国々」
葵小学校　松本 雪穂　教諭

（文責　洛央小　石原 一繁）

極覧会より

極覧会 海老瀬 隆博

今、京都社研が全国に発信しようとしている社会科は、伝統の「子どもが主体」である授業と並んで、「誰もが実践できる」「学ぶことが楽しいと思える」授業の実践研究に基づくと伺っている。私はこの研究の方向を共感的に捉えたい。「社会科が大好き」な子どもや教師が一人でも多く育つことを強く願っているからだ。

名人芸のような見事な授業は、その授業者しかできないような、その学級の子どもたちだからできるような授業であることがほとんどだ。それはそれで、学ぶことが多くある実践には違いない。しかし求められているのは、再現性が高く、広く実践することが可能な授業ではないか。それは「こういう授業をやってみたい」「これなら私にもできそうだ。」と教師が思える授業であり、「社会科は面白い」と子どもたちが感じる授業である。

こうした授業研究を進めるにあたり、まず「授業で教科書をどのように活用するか」について考えたい。まだ若い頃に「子どもは教科書を学ぶのではなく教科書で学ぶのだ」と教えられた。まさしく至言であるが、教科書を活用する意識を高め、積極的な授業実践に結び付けるまでには、自分自身が至らなかったことを少し悔いている。人とは違う個性的な授業をめさす志は尊重しつつも、教科書の内にある「子どもの学びの基礎・基本」を、どうすれば「子どもが主体」の授業に組み入れることができるのかをぜひ検討したいと思う。

子どもが自ら進んで学ぼうとする時に、教科書は、その学習活動を支える役割をもっと果たせるのではないか。社会的事実を調べ、分かったことをまとめる。それを基にして話し合い、考えたことをまとめる。その過程において、子どもは調べ方や考え方を身に付けていく。どの場面においても、教科書を有効的に活用する方法があるはずだ。地味ではあるが、継続して研究に取り組みたいテーマではないかと思っている。

大学の講義では、最初に、学習指導要領解説と教科書を丁寧に読み込んで、そこから教材研究を進めるようにしている。単元の大まかな流れを捉え、授業イメージを明らかにしていくことが、学生であっても、かなりの程度まで可能である。現場の教師であれば、教材研究を進める際に、教科書はなおさら重要な手掛かりとなるだろう。また、ある生徒指導困難校で、優れた授業を実践する先生が「教科書は、この学級の子どもたちにとって、みんなで共有できる貴重な文化財です。」と話されたのを覚えている。子どもたちが、社会科の教科書を音読している姿が印象的であった。既成概念にとらわれずに、教科書を子どもの学びに生かしたい。

次に、子どもの発話について考える。授業で「体裁の整った」「都合の良い」発話ばかりを取り上げてはいないだろうか。教師は「その子が本当に言いたいことは何か」を探りながら聴く（聞く）ようにしたい。中には、何かはっきりしない口調で発話する子どももいる。迷いながらも考えているのかもしれない。形を整えてはっきりとした口調で発話する子どもの方が、実は、あまり深くは考えていない場合もある。授業記録を丹念に取っていると、そうした、ある意味で曖昧な発話の直後に、話し合い活動が活発に展開する時がある。たいていの場合に、そういう学級は、子どもたちがよく育っている。耳を傾けて友だちの「本当に言いたいこと」を探ろうとするような共感的な関係に満ちている。共に学びあう学級とはそういうものではないだろうか。

そこでは、実は教師自身の対話性が問われていると言ってよい。その子どもが本当に言いたいことを聴き取ることのできる教師は、友だちの本当に言いたいことを聴き取ろうとする子どもを、授業で育てることができる。話し合い活動の本質はそこにある。子どもどうしの対話は、子どもと教師の対話のあり方から深い影響を受けているということを、授業者である教師は自覚する必要があるだろう。子どもの発話を肯定的に受け入れる覚悟と責任が、私たち教師には求められている。

「ふれあい・思いやり・感動」の本質を見極めることは、
教師が生きることのこわさをみつけることです。（清水 安 先生の言葉）